関西自然保護機構会誌 23（2）：89－90，2001

巻頭言

「地域らしさ」にこだわる

滋賀県立琵琶湖博物館　布谷知夫

ここ数年，滋賀県で幾つもの県や関連団体の委員会の委員になっている。県立博物館の学芸員であれば，肩書きとしては無難だし，県の職員だからあまり無茶な発言もしないだろうということだろう。ところが，そういう幾つかの委員会に出席していると，おもしろいことに委員会のテーマはまったく別でも，共通した話題や議論が行なわれている事がある。そのひとつが「滋賀県らしさ」あるいは「地域らしさ」をどう追及するのか，ということである。

たとえば環境教育をテーマにしたある委員会では，滋賀県らしい環境教育をどのようにして実現するのか，ということを基本的な方向性として，それを強く意識しながら具体的な話題をあげて議論をし，提案をまとめる作業を行なった。この「滋賀県らしさ」ということは現在の滋賀県の中での一つの方向性であるようである。しかし同時にこの「地域らしさ」ということこそ，これからの自然保護を考える際の大切なキーワードになるのではないだろうか。

ある遺跡をどのようにして保存していくのか，という議論があった。遺跡を埋め戻して看板を立てて遺跡公園にするのがこれまでの多くの例であるが，それでは本当に遺跡に関心がある人以外には全くといっていいほど関係のない，興味を持ってもらえない場所でしかなく，遺跡の大切さや考古学をアピールすることには，ほとんど役にたつとは思えない。遺跡を埋め戻す事は当面の方法としてはやむ終えない事であろうが，それで終わりにしたのでは，せっかくの遺跡を活かす事ができないであろう。遺跡を活かすためには，その遺跡がある場所で昔から人がくらしていたこと，そのくらしは当時の自然環境や地形，気象条件等と関係があり，その昔からの地域の条件は今もその地域のくらしに大きな影響を与えており，くらしを考える基本的な条件である事など，遺跡と現在のくらしとがつながっていることをその地域でくらしている人に理解してもらう事が大切である。

ところが，現在の地域を成り立たせている条件というものを，現在そこに住んでいる人が意外と知らないのである。実際に行なわれた議論では，昔の湧き水や水利の維持の苦労の跡が現在も残っていることや，昔の遺跡が自然堤防の上にあり，その結果，現在の町の広がりもその自然堤防を中心にして広がっている事，またそれ以後の水路の掘削や琵琶湖とのつながり，扇状地の砂地の上につくられた桑畑，そういう地域に残された自然利用や立地の跡をそこにくらす人に知ってもらう事で，地域が違ったように見え，その認識の中に遺跡を組み入れる事で，地域起こしと遺跡保存が一体となって実施できるのではないか，と思う。

地域を野外博物館のようにとらえて，地域資源をルートでつなぐ事で地域を見直していこうという議論があった。ここでも地域の資源というものは，いわゆる観光資源ではなく，地域のくらしを成り立たせている基本的な自然環境や地形等からおこるくらしの痕跡を中心にすることで，地域にくらしている人が中心となった地域作りができるであろうし，そのためには地域の資源を地域の人にもっと知ってもらう事が必要だろうという議論

になった。たとえば滋賀県中主町にある平清盛にかかわるという祇王井用水は，地理学の研究者の中ではその名を知らない人はいないというほどに有名らしいが，その用水が今も大量の水を運び，田畑を潤している事は，地元の人は当たり前の事として特に意識していない。そしてその用水の言い伝えや実際の掘削の苦労や維持の大変さを地域の人が知る事で，自分がくらしている地域を見直す事につながるであろう。地域に隠れている資源を掘り起こし，それを地域の人に知ってもらう事がまず大切である。

このように考えると，地域ごとに大切にして保存をすべきものや地域として発展をはかるための理想的な姿というものは，個々の地域によってまったく異なるものがあることが分る。何よりも現在の地域を成り立たせている歴史的あるいは自然的な条件をまず大切にするということが，地域らしさを発揮できる条件である。滋賀県の多くの地域の場合には，昔からの水利用，治水と利水によって地域の条件が形作られている場合が多く，地域の資源は水に関わっている場合が多い。もちろん人がくらしていく上では水は共通して大切であるが，滋賀県ではその治水や利水の苦労の跡が現在も地域のくらしの中に残っているのである。私は10年前に滋賀県で仕事を始めた時に，町の中でも川の水との関わりが残っていることに驚いたものである。そしてその後に県内を歩きはじめて，急速にその関わりが変化していく様子を見る事になってしまった。

これまでどちらかといえば，理想的な自然の状態を全国共通した姿として考えていたのではないだろうか。そしてその精神的な基準は都会でのくらしであり，求める自然は都会から脱出するための森林や草原的な自然であっただろう。そこでくらす人のくらしや地域の歴史は非常に抽象的なイメージでしかとらえることができていない。

しかし特定の地域の自然を残そうとすると，その地域で何が起こっているのか，これまでどの様な歴史があったのかを知ることが必要となる。地域が，その地域ならではの主張をする事が必要となるであろう。ある意味ではその主張には客観性は無くてもいいかもしれない。その地域の人が自分たちの地域として主張する事であれば，その基準はなにもないはずである。それは地域ごとにまったく異なってあたりまえなのである。そのようにして地域にくらす人が地域を見るようになった時，その地域の資源である自然や歴史は守る事ができるようになると思う。

そのように地域にこだわることが，地域らしさを意識する事であろう。この時の地域は，場合によって県であったり，市町村であったり，もちろん行政区画ではなく，何等かで区分して意識されている地域でいい。地域らしさを作りだしている自然やくらしを意識すること，そしてその地域らしさにこだわる事が，その地域にくらす人の合意のなかで，地域の自然を保護し，おそらくその自然を継続して残してきたくらしをも残す事につながっていく。

地方の時代と言われるようになって久しいが，政治経済，あるいは情報など何をあげても地方の時代になっているとは言い難い。だからこそ，その地域を特長づける自然やくらしを残すためには，その地域らしさにとことんこだわり続ける事が必要だと思う。